

この一年を振り返って

理事長 古澤茂堂

この一年を振り返ってみて、最も大きな出来事は佐藤藤彰局長の突然の御逝去（平成30年2月27日）でした。

佐藤局長は、中味の濃い仕事をされました。就任後間もなく「理事長、この予算規模にしては事業費以外の経費が多すぎる」と指摘され、その通りと思い改善を依頼すると、手順を踏んで現在の体制に改革しました。これが財務力強化の大きな基礎になっています。次に、設立20周年記念事業では、余分な経費が掛からないよう、十分配慮し内容のある諸事業を計画実行しました。また、社会福祉法人法の改正に伴う諸規定の整備の必要が生じた際には、仕組み全体を改正するために、行政庁との連絡、全国の連盟からの見解聴取、他団体の文例取り寄せ、原案の作成など、全て一人で当たられました。特に、最後の仕事は大きな負担となってしまったのではないかと、今となって悔やまれます。

昨年から体調不良を訴えられ、県外の治療施設で1ヶ月位治療に専念し、帰ってから結果良好と聞いておりましたが、しばらくして辞任したい申出がありました。得難い人材なので勤務日を少なくしてもいいから何とか継続をしてもらいましたが、本年に入ってどうしても体が許さないからと辞意を表され、やむを得ず後継者の選任を相談中に訃報に接しました。熱い心で「いのちの電話」を愛し責任感を持って熱心に業務に当たられました。人望が厚く葬儀には多くの相談員も参列しました。謹んで御冥福をお祈りします。

後任の局長の選任は、大変だと思っていましたが、市社会福祉協議会常務理事の栗原浩一氏に引き受けてもらうことができました。同氏はこれまで当法人の理事もされており、事業の大略は御存知なので、多方面で手腕を発揮していただけると信じています。

県内の自殺者数は減少しつつあるも受信件数は増加しており、自殺率も全国でも高い水準にあり「いのちの電話」の活動の重要性は変わりません。倍旧の御支援をお願い申し上げます。

いのちの電話の目的

いのちの電話は、孤独の中にあって、時には精神的危機に直面し、自殺をはじめ、助けと励ましを求めている一人一人と、主に「電話」という手段で対話することを目的とする。